

トータス大会 3 日間大会

チェイシング感想記

村越 真

今シーズンに入って、松沢との互角の戦いが続いている。公認作手と筑波ROCでは連続して完敗、同一選手の後塵を連続して拝した経験は80年以降、記憶にない。東大会では一矢報いたものの、今回の3daysでは初日にまたしても完敗。2日目は、気合いを入れなおして臨んだ。

2日目のコースは登りの少ないテクニカルなコースで、いきなり突き放してしまうには絶好の舞台。前半はその気合いがいい方に作用し、6番コントロールではすでに松沢に3分以上の差をつけていた。その後7番、9番で大きなミスをして、結局ゴールをしてみたら、松沢には約30秒差、この日から出場の鹿島田にも10秒差という平凡なタイムに終わっていた。結果的に、トータルタイムで松沢とは10秒差で追われるチェイシングとなった。



村越のフィニッシュ

この状況でどう戦うか？こちらが脚にも技術にも自信があるなら、何も考えることはない。しかし、松沢にはどうあがいても走り勝つことはできない。最後の誘導の700mもどうせ登りだろう。最終コントロールで30秒くらい差があつたくらいでも勝てないだろう。彼と一緒にオリエンテーリングをすることになっても、どこかで振り払わなければならない。そのチャンスは絶対に何度かはある。焦らずチャンスを待ちそれを生かすことだ。



松沢、ビジブル区間で村越を追う

最初のチャンスは意外と早く回ってきた。スタート時刻の差10秒は思ったよりも大きかった。1番コントロールが慎重なアタックを必要とするのを素早く地図から読み取ると、トップスピードで尾根を下った。藪(B)と明確なアタックポイントのないこのレグなら、差を広げられるかもしれない。実際思惑通りで、1番を難なくとった時には松沢の気配は感じられなかった。

ここで手を抜いてはいけない。スピードに乗った松沢がいつ背後に迫ってくるとも限らない。2番も、登りの少ない下回りルートが見えてそっちを選び、トップスピードで走る。松沢が上回りをし、アタックで躊躇をしたこともあり、この時点で既に1分近く差がついていた。3から7にかけて、適度に難しいレグが続く。5ではコントロールのある沢の一つ上の緩やかな沢に捕まってしまう、上か下かの決断を迫られる。ミスをすれば間違いなく追いつかれる。上部には沢らしきも

のがないのを確認して、下に斜面をコンタリングすると、斜面上の沢が見えてくる。助かった。

この危機を除くと7番まではミスもなく、おそらく2分程度のセーフティーリードは奪っただろうと考えた。これが油断につながったのか、8番ののっぺりした斜面の小凹地を外してしまう。周囲には現在地を確定できるようなものは何もない、こんなことなら植生界を使ってもっと慎重にアタックすべきだったと思ってあとの祭りである。上に上がっても下に上がっても、コントロールがない。2分くらい探してようやくフラッグのある穴を見つけた時、松沢もコントロールを探してそこに現れていた。

9までは、別にミスってはいないというカッシーと20秒も差がつくようなトップスピードで走って、そのままあわてて斜面の方向に下り始める。10までは、あらかじめの検討ではレグ線のある方向にある小道をつないで走る予定であったのだが、この時は松沢に追われて焦っていた。気づいた時には、もうそのまま下りしかないという位置まで来ていた。ここまで来れば、元々下ろうと思っていた沢の東の小道を下り、斜面のふちの小径を下るしかない。そうそうロスにはならないだろう。第一松沢が来る限りロスではない。実はこの失敗が有利に作用したのである。僕がまっすぐ降りていくのを見て、斜面のふちの小径を地図から読めていなかった松沢は、そのルートが明かにミスだと思ったらいいのだ。そして僕が最初取ろうとしていたルートに乗り換えていった。中間計時では、僕が30秒ほどリードしていたのだが、その給水がまだ用意できていないと勘違いした松沢は、自分は先頭に出たのではないかと思ったようだ。

そんな事情をしらない僕は、とにかく出せる限りのスピードで10、11をクリア。11ではちょっとオーバーペース気味で危なかったが、直進がびたつとあたり、またコントロール周囲の小径もぼちり分かった。13から道に出るところで若干ロスがあったが、少し差ができたかなという状態でビジュアルへ。



優勝インタビューを受ける 村越

ビジュアルではとにかくトップだというのは分かった。ビジュアル通過後も、しばらく聞き耳を立て、少なくとも1分以内にはいないよだというのも確認した。しかし、1分では十分ではない。ルートをミスすれば、すぐに追いつかれるし、登りを歩いていてもあつという間に追いつかれるだろう。16へのアップ30mはこのレースでもっとも辛い時間だった。

松沢と出会ってしまったら、彼に先行させて、彼が

いかない方をとろうと思っていた17-18のルートチョイスも、一人だったので、速いだろうと思うコンタリング道ルートを選択。えっ？こんなに高いのかと思う尾根を巻いて、難なくコントロールへ。最後の登りはへくへくで、いったいどれくらいリードがあれば勝てるのか見当もつかず、最後まで手が抜けなかった。

辛かったレースだが、9.2kmという長丁場を集中してレースができたのも、10秒差のチェイシングという状況のお陰でもある。8のような凡ミスはあったが、いいレースができたと思う。

トータスのOLに参加して

折井匡

13日(日)のトータスの大会へ参加してきました。今回はちょっとだけOLに興味を持った小5の娘の付き添いです。実際に公式な大会は娘は初めてなので、事前に入門書を見ながらレクチャーしました。。

ハケ岳レジャーセンターの北の 憩意にしてもらっているパイ屋さん(ハケ岳パイ工房、私はハケ岳へ来たらいつもここでパイを買います。最近外でパイを食べる事ができるようになりました)にお願いして車を止めて、レジャーセンターで受け付けします。事前の申込は「森を歩こう」という初心者コースです。終わったら当日受付でオレンジコースをやりたい旨を話して、スタート地点へ。

レジャーセンターの西の川を渡った場所から1番目にスタートし、林道を北上しながら1番を目指します。てっきり初心者コースだから道端の見える場所にあるものだと思っていたのですが、ちゃんとそれなりに隠してありました。1番コントロールから大ボケで、通り過ぎてしまいました。2番を先に見つけてしまい、あわてて1番に戻ります。「約400mだから240歩だよ」などと言って数えていくと260歩でゲット。一番大変だったのが4番でした。小道のT字路なのですが、ちゃんとした道でないで、本当にそこから入って良いか分からないからです。半信半疑で藪の小道に入って行って4番が見つかった時は、ほっとしました。その後順調に約1時間ほどで8つを見つけてきました。参加賞に完走証をいただきました。

オレンジコースの申込をしてスタート地点まで移動です。なんとレジャーセンターから、坂道を40分も歩いてスタート地点へ到達。これだけで疲れてしまいました。最終組だったので、撤収を少し待っていたら、20分ほど休んでからスタート。初めて使うSIパンチシステムは使い方が非常に簡単で、その反対に本当に大丈夫なのかが、大変心配でした。(何の問題もなくうまくゆきました。ARDFにも使えそうです。)

入門コースとは違い、いきなり藪を突っ切ります。等高線の見方や植生、森を突っ切る方法などを話しながら2.8Kmの距離を1時間20分かけて帰ってきました。でも見つけずらさから言うと「森を歩こう」のほうがあったような気がします。それからゴール近くは上級者と同じ道に戻る事になり、何人も抜かしてあげ

ました。そのせいで、ラップ2分15秒を20分もかかってしまいました。結果は11番中10位、1位と50分差がありました。

今度は高遠の大会へ参加させ、一人で走らそうと考えています。

参加して思った点

本当に素晴らしい大会でした。運営の方には頭が下がります。それなのに重箱の角を突つかせていただくなら、次ぎのように感じました。

「森を歩こう」コースの場合、初心者だけのグループでは難しい設定だと思う。ある程度地図が読めないと進められない。(実際に地元のグループが迷って完走できなかったようです)

オレンジコースのスタート地点が遠すぎる。娘もこの移動の40分がなければ楽しかったと言っています。

ゴールへ至る道を上級者と分けて欲しかった。特に小道で追いつかれてしまい、道を譲るのに時間を消費した。

ゴールで配付していただいた飲み物は甘いジュース類で、できたらボカリや冷たい「大泉の湧水」が欲しかった。



3日間大会を終えて

NPOトータス理事長 白戸秀和

トータスの3日間大会に参加されたみなさん、遠くから、また、帰省ラッシュの中、お越しいただきましてありがとうございました。

夏の八ヶ岳高原はいかがでしたか？ 1977年の第2回3日間大会最終日以来の降雨が心配されましたが、いつの間にか台風はどこかに逃げてしまったようです。貴重な夏のパケーションを割くに値するだけのものを創りだせたのかどうか……。自信はありませんが、一人でも多くの方々が、満足した気持ちで家路につかれたことを期待しています。

トータスにとって、3日間以上の多数日大会は、八ヶ岳で開いた1985年の5日間大会以来15年ぶり、3日間大会は、首都圏で開いた1980年の第5回3日間大会以来、実に20年ぶりのこととなります。参加された方の中にはかつての3日間大会からのランナーも多数いらっしゃって、期待の大きさを感じました。

チェイシング

一歩でも先にゴールに飛び込んだ者が即勝者となる……チェイシングスタートの最終日は、楽しんでいただけたでしょうか？

多数日大会は、一人で頑張るリレーのようなもの。毎日のレースをあきらめず翌日にタスキを渡すからこそ、自分自身のアンカーとなる最終日のゴールは、格別のものがあると思います。

わずか10秒差のまさにチェイシングスタートとなったMEクラス。新旧対決は、村越さんが一度も追いつかれることなく松沢さんを振り切りました。ベテラン対決のWEは、木植さんから5分以上後にスタートした高野さんが得意の「おおいずみ」で、ピハインドをひっくり返しました。

トータスカップのMSクラスは最終日4、5人がパックとなる大混戦。猛烈な追い上げを見せる早野さんとトップスタートの川崎さんが最後まで競い合いましたが、秒差で川崎さんが逃げ切りました。MJクラスは、それまで2日間ともトップをとっていた埴さんを、最終日トップで走った寺田さんが抜き去りました。WSクラスは、長谷川さんが一人完走を果たし、メダルを獲得しました。

一般クラスも激しい争いがあったようです。BLACKクラスは藤咲さんが圧勝、BROWNクラスは男性を抑えて長田さんが安定した走りで見事に栄冠を勝ち取りました。BLUEクラスは、最終日に2位となった以外は圧勝した宇野さんが王者の走りを見せ、GREENクラスは、女性の羽鳥さんが高校生男子を抑えて優勝。ORANGEクラスは、出場選手中最高齢の梅野さんがベテランの味を出して初日の貯金を守り切りました。

チェイシングは優勝争いだけでなく、3位でも5位でも10位でも20位でも、勝負を楽しむことができます。前の選手の背中を追いかける光景があちこちで見受けられました。

イベント

「イベントのトータス」という形容詞がつきそうなほど、今回もイベントがてんこ盛りでした。

3日通したものとしては、何よりも初心者を対象とした「体験クラス」を設置したことが意義深いものでした。

た。「森を歩こう！」には3日間合計で54組の参加がありました。2日目には、ランナーを視野に置いた「トレイル・ランニング・オリエンテーリング」が開催されました。

「かわらばん」と称して、毎日、新聞形式で成績やみどころ、イベントリポートなどをお知らせしました。同じ場所に何日間もいられる多数日大会でないといけない試みです。また、ME、WE選手には「酸素」が提供されました。

このほか、最終日を除く1日目、2日目は、春の大会で公表だったラップ表のゴール直後の配布と、夕方、表彰式前後のクラス別ラップ表の販売、石井さん(千葉OLK)主催のストレッチ講座がありました。

単発のものとしては、初日には、「限定15人 大湧水ツアー」が抽選倍率約3倍という高率のもと開かれました。地ビールと花火を売り物とした夜の「花BEERパーティ」も盛況でした。

2日目は、世界選手権(WOC)誘致を記念としたシンポジウム「WOC2005」がWOC SQUAD JAPANと共催で開かれ70人も参加者が集まりました。夜は、恒例のOLP兵庫によるナイトオリエンテーリング大会。月夜の八ヶ岳高原を「昼の部」に飽き足りない(?)ランナーたちが爽快に走り回りました。

3日目のイベント・・・ チェイシングで十分ですね。ご協力とご参加、ありがとうございました。

負担

しかし、舞台裏は火の車でした。「参加者のみなさんのために」と頑張ったことで、負担は極度に重いものになっていました。

上記のような星の数ほどあるイベントに、直前を除いて実働したのは数人という状態でした。トレイル・ランニング・オリエンテーリングを3日間から2日目のみに縮小し、PRも控えたものの、ばく大な作業量の軽減にはほとんどつながりませんでした。

トータスは春だけで「W杯の国内選考会」「春の2日間大会」「W杯と大学新歓行事」と計4日間、大会運営に携わってきました。このときの疲れがポディーブローのように効き、3日間大会の準備が恒常的に遅れたことも否めません。

最大の問題は競技面でした。数多くのイベントを楽しんでいただけののも、良質な地図とコースなど競技面を万全に準備してだからこそです。春には77年以来23年ぶりの競技不成立という事態も起きており、失敗は絶対に許されませんでした。競技だけでなく運営面でも当日までまさに綱渡りで、ラッキーな面もありました。私たちがみれば大会をどうにか乗り切ったというのが正直な印象です。

NPOとして

この大会と前後して、私たちは、NPO(特定非営利法人)を申請しました。NPOとして活動することで、いわば半ばこっそりと大会を開くスタイルからの脱却を目指しています。地域の方に理解を得ることが、長期的視野で見た場合、不可欠だからです。地域在住者がほとんどいないにもかかわらず、ある種、地域クラブとして地元の方との交流を図りつつあります。「体験クラス」の設置は、その活動のひとつで、来年以降も継続的に開催する予定です。

一人一人が、できることで、できることをする。このことが、2005年の世界選手権にもつながっていくの

だと思います。

最後に

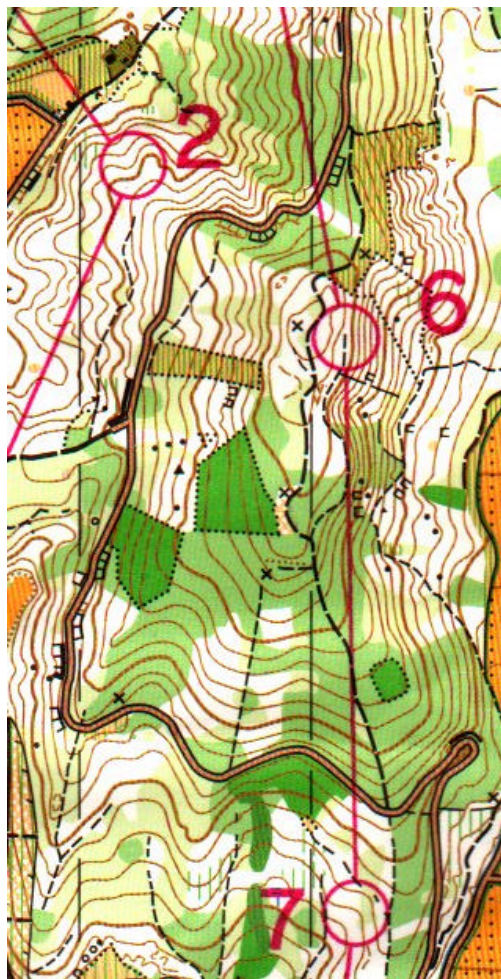
何はともあれ、あらゆるものに恵まれて、大会は無事終了しました。大会を共に作り出した主役である参加者のみなさん、さまざまな面で協力くださった八ヶ岳高原在住のみなさんにお礼をしたいと思います。

また、いつも献身的協力をいただいている泉郷さま、突然の協力依頼を快諾してくださったキッコーマンさま、超(?)マイナスポーツを暖かい目で見守ってくださったナイキジャパンさまにも深く感謝いたします。

そして、八ヶ岳レジャーセンター大泉の須田さん。最終日の表彰式と閉会式に須田さんは15年前と同じく遠くから模様を見守ってくださっていました。須田さんなしに、トータスは、あるいは八ヶ岳におけるオリエンテーリングはなかった、といっても過言ではなく、感謝のことが見当たりません。

最後に、1週間のうち10時間足らずしか寝ずに大会当日を迎えたメンバーもいるトータスの全員。全力疾走、おつかれさま。そして、ありがとうございました。

また八ヶ岳でお会いしましょう。



八ヶ岳山麓のニューエリアマップ「旭山・堤山」